

食生活を考える
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

I 主題設定の理由

本研究会では、授業を通して、食に対する興味関心を高め、食べ物の働きや栄養バランス、感謝の心など、食に関する知識を深めることにより、子どもたちがより良い食習慣を身につけられることを目指している。また、学級担任と栄養教諭・栄養職員のチームティーチングによる授業のあり方や教材教具の活用方法など、効果的な学習活動の実践にむけてとりくんでいる。

学校教育の一環として、食に関する指導が計画的に実践され、望ましい食習慣づくりと、学校生活を生き生きと楽しく過ごす子どもたちを育成したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究の内容

1. ティームティーチングによる授業研究

(1) 小学校学級活動 題材「めざせ！おはし名人」

授業者：後屋敷小学校 教諭 廣瀬明子，栄養職員 高野明子

内 容：身近な人から箸づかいを学ぶ機会が薄らいでいるため、箸を正しく持つことができない子どもが多いという実態があった。お箸の歴史や日本の食文化に触れながら、自分の箸の持ち方を見直し、正しく持てるよう繰り返し練習を重ねながら自己決定した課題解決に向けてとりくんだ。

成 果：実態把握から授業づくりができていたこと、発達段階に合わせた教材教具の工夫がされていたこと、家庭との連携もとれていたことなど、本研究会で目指してきたすべてのことを網羅していた。中でも学級担任と栄養教職員の連携は、日常の給食指導にも引き続いている。

(2) 食育学習会「給食センターにおける食育の課題」

提案者：塩山中学校 栄養職員 関初実

内 容：甲州市給食センターは、平成26年度の夏の稼働から1年が経過した。調理の様子や学校との連携、保護者との連携や地域との交流など、給食センターの1年間の取り組みを発表し、学校から離れた給食センターから、食育をどう身近に考えさせることができるか、学習を深めた。

成 果：大型給食センターや中学校現場での食教育実践の難しさを、みんなで考えるきっかけになった。今回は映像の教材がとてもしっかりやすく、ICTなどの活用もこれからは大切になっていくこと、遠く離れた給食センターの苦勞を子どもたちに伝えていくことの大切さを再確認した。

2, 一人一実践

一人一実践の報告は、各学校で行われた様々な食育に関わる指導の様子を知ることができ、参考になる情報が多くあった。過去に行った授業実践を再度活用した報告があり、継続した研究の効果を感じることができた。食に関する指導を行う機会が増え、子どもたちに食について考えさせるきっかけづくりとなった。

3, マイ著作りと環境教育学習会

夏の統一授業研の内容とも関連して、山梨県産の間伐材でマイ箸づくりを体験し、マイ箸と環境問題を考えるウェビングマップの学習も行った。どちらも、親子学習会や自分の教室でも活用できそうな、実践的な内容であった。

4, 教材教具の共有化

教材教具の共有化は、毎年の課題である。昨年度一覧表は作成したものの、活用が少なかった。やはり教材教具のデータ化を望む声が多く、今年度は授業研をはじめ、一人一実践の中で作った指導案やワークシート・教材をデータ化して配布することができた。来年度の実践の広がりが期待できる。

Ⅲ 成果と課題

1, 成果

- ・研究授業、食育学習会、一人一実践の発表、夏季学習会など、食教育推進のためのさまざまなとりくみをするにより、食教育の大切さがより明確にできた。それにより、テーマに迫ることができた。
- ・管理職、学級担任、栄養教職員のそれぞれの視点で意見を交わすことができ、組織として充実した研究ができた。
- ・授業実践では、児童の実態をふまえた内容が有効であること、それぞれの専門性をいかしたTTの授業が効果的であること、授業で終わりではなく授業をきっかけに日々の積み重ねが大切なことを確認した。

2, 課題

- ・大型給食センター化にともない、栄養教職員の数も減ってしまう。教材の共有化を今後もはかり、食教育の実践をとりくみやすくすることが必要である。
- ・実践した授業が今年度で終わりにならず、次年度で実践が広がるようにしたい。

(部長 小林 由紀子)